

職員アンケート A=できている B=どちらかといえはできている C=どちらかといえはできていない D=できていない

②自己評価および外部評価項目(55項目)

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
I. 理念に基づく運営							
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	C	法人理念を職員会議で定期的に確認し、事業展開の礎にしているが、新しい職員が多いこともあり、十分に浸透できていない。今回のサービス評価と、次年度目標策定にあたり、理念との連動が分かりやすくなるようにしたい。	・どのような理念か教えてほしい。定期的な確認はどのようにしているのか。 ・職員が一堂に会するのが難しいなら、理念に沿う目標や標語を作成し、掲示したり、毎日唱和したりしてはどうか。 ・職員会議でどれくらいの頻度で、どのように確認しているのか。 ・入居者家族にも、法人理念を知らせてもらえれば。		・法人理念 ①ゆったりとその人らしさを受け止める、②常に自分をふり返る、③地域福祉活動への積極的参加と推進。 ・年度目標や行動計画は、法人理念を常に意識して作っている。 ・年4回以上、職員会議で理念を確認している。 ・職員が日常的に理念を意識できる方法を検討したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	B	コロナ渦で外出の制限が続いたが、祭礼や獅子舞、防災訓練など、地域の一員として参加している。広報紙は地区の全戸に配布している。	・事業所自体が地域の一員として日常的に交流しているのに、自己評価がBランクになるのはなぜか。 ・地域の行事に参加、協力しており、何も言うことはない。 ・コロナ渦だが参加しているのを見かける。広報でホーム内の様子を見ている。 ・コロナ渦で交流が行えず、自治会行事への参加も制限があつて残念だった。今後、地域交流室の活用も含め、可能な中で区民との交流を進めてほしい。		・コロナ渦の状況から、評価が低くなった。職員は以前のような地域とのつながりを取り戻したいと思っている。 ・地域交流室の活用方法を、もっと具体的に考えていきたいと思っている。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	A	コロナ渦で例年の行事がない中、ふきのとうカフェ(認知症カフェ)や認知症キャラバンメイトの活動に多くの職員を派遣している。中学校の職場体験学習に積極的に求人を出したが、直前に中止となったのは残念だった。		・中学生にとっても貴重な体験なので、今後も積極的に行ってほしい。 ・老人クラブ連合会等のつどいに、講演等のお願いを検討。	・中学生はもとより、乳幼児、地元綾戸の子どもたち、その保護者世代とのつながりを、持っていきたい。 ・認知症や介護のことでしたら、地域の方へお役に立てることもあるかと思えます。
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	B	今年度は書面開催3回、対面開催1回。運営状況、ヒヤリハット・事故・苦情報告、感染対策、職員研修状況等を報告。行動目標や事故対策等、意見を基にサービス向上に取り組んできた。	・ヒヤリハットの中で、薬の件は再確認が必要と考える。 ・会議でも意見したが、薬の事故は防げないものか。 ・ヒヤリハット・事故の報告は毎回気になっている。大事がなくてよかったが、同じような事故(薬関係)は改善策・確認方法を検討してほしい。 ・書面などで現況を見て、日常の大変さを痛感している。		・薬の入れ間違い防止、渡し忘れない方法等、対策を講じています。それでも事故がゼロになっていないのはご指摘の通りで、今までの対応で十分なのか、検討します。 ・薬の件は大小関わらず、包み隠さず開示することが、事故予防につながると思います。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	B	自治体の規模が小さく、竜王町職員と顔の見える関係ができています。地域包括支援センターに運営推進会議委員を依頼。コロナ渦の対応も緊密に連携を取っている。町より「地域の身近な介護相談窓口」や認知症カフェの運営を受託。	・コロナ渦に於ける施設運営は、行政指導に頼ることなく、現下の感染状況を見極め、より慎重に運営してほしい。		・新型コロナウイルスは、次の展開を読むことができず、今までにない判断を迫られ続けました。正しい情報をつかみ、的確で迅速な判断ができるように努めます。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	A	身体拘束該当事例はない。身体拘束適正化委員会を年4回以上実施。各事業所の身体拘束の芽になりかねない課題を検討し、職員の意識向上に努めている。玄関は夜間以外開錠。	・今日まで大きな事故につながる問題がなかった訳ではないと思う。現状が維持するように引き続き努力を。 ・過去、入居者がいつの間にか玄関から出て行くことが何回もあったのは。 ・身体拘束しないケアは理解できるが、年に数回無断外出があったので、玄関は閉めておく方がよいのでは。 ・玄関施錠はサービス指定基準に示されているのか。 ・入居者の中で日常行動に問題のある方も出てきますので、日頃から課題のある方の介護・介助の手法の研鑽に努めてください。		・無断外出、行方不明が地域の皆様からご心配いただく事案であることを再認識しました。「外に出たい」「帰りたい」そう思われる入居者様のケアをどうするか。地域のご心配も含んで考えていきます。 ・玄関を閉じれば、違う出口を探されます。訪問するたびに鍵がかかっている施設は、やはり閉ざされた印象を持たれると思います。 ・玄関の施錠は指定基準にはありませんが、サービス評価の項目には挙がっており、取組みの有無が問われています。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることのないよう注意を払い、防止に努めている	A	法人全体で虐待防止研修をするほか、職員会議で時事情報等で学びを続けている。私たちの関わり方や声かけが、入居者にとっては怖かったり、行動制限と感じたりする場面があるという危機感を忘れず、意識を高め続けたい。			

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
8		○権利擁護に関する説明と納得 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	B	制度を利用する入居者は現在いない。社会福祉士である管理者は、必要に応じて入居者・家族に情報提供できるよう学びを継続して準備している。職員への研修も会議を通して実施。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	B	契約時は時間をかけて説明し、理解納得いただけるよう努めている。昨春の介護保険制度改正にあたっては、直接説明して同意を得ている。利用料表を改定し、利用者・家族がひと月の負担を分かりやすく捉えられるようにした。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	A	3ヶ月ごとの介護計画説明時、年1回の個別懇談を軸に意見把握に努力し、面談結果を運営推進会議に報告している。利用料支払時の対応、職員数が倍増する中で職員との顔なじみの関係作り等、家族の意見から改善した。	・家族面談の結果を運営推進会議に報告、というのはいつ実施したか。 ・引き続き、家族とのつながりを深め、入居者の希望に沿った介護サービスの提供を。		・11月の会議で、面談結果を口頭で説明しましたが、残り半分の結果を、1月の会議で報告できていませんでした。申し訳ありません。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	B	年2回、職員面談では意見や提案を聞く場も設けている。職員会議でグループワークをして意見が出やすいようにしている。風通しの良さ、実行の早さが小規模の強みであり、今後も努力を続けたい。洗濯機への動線改良、門扉ブザーの廃止等、職員の提案から実施。	・施設のレベル向上には、外部の意見も大事だが、個々に課題を持ち、頑張っている職員のモチベーションを下げないように改善をすること。前向きな提案制度を作るのはどうか。ささやかな奨励賞を作ってみるのも。 ・職員の意見を聞いて、生活しやすいように改善している。 ・実際に現場で働いている職員の意見や提案は積極的に取り入れてほしい。改善提案用紙を作る等、意見を集める工夫も。 ・職員間で意見や提案を聞き取ることから実行し、意思疎通を図ってほしい。 ・職員がいつでも提案できる体制(提案箱等)を作っては。 ・門扉ブザーの廃止の目的と効果は。それは身体拘束しないケアに沿ったものでしょうか。		・職員数も多くなり、面談や会議でのコミュニケーションだけでは不十分になっているかもしれません。いただいたご意見を参考に、意見を出しやすい職場作りに努めます。 ・ブザーは長年使用してきたが、その音が不快と思う入居者もおられ、また今、誰のために使用しているのか見直した結果、使用を止めています。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	B	年度末に自己評価を行い、次年度の目標を設定。個別面談をして思いを聴き、心配ごと等の把握に努めている。介護職員特定処遇改善加算算定をてこに、職場環境と処遇の改善に引き続き取り組む。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	B	コロナ禍にあっても、オンライン環境を整備して研修に積極的に派遣している。認知症ケアの質向上を主に、一人ひとりに適した研修参加を行っている。新規採用職員は定期的に面談をし、心配ごとや課題を話している。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	B	町内の医療・保健・福祉関係者の勉強会「ぼちぼちねっと」、近隣7グループホーム合同の勉強会、東近江圏域のグループホーム部会を軸に、同業者と顔の見える関係を築き、各現場の生の声に刺激を受けている。			
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援							
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	A	入居から1ヶ月程度は特にコミュニケーションを密にし、職員間で情報共有をし、関係作りをしている。地元出身・在住の職員が多く、昔話や地元の話題に安心感を抱かれる新規入居者は多い。		・利用者のことを、外部にあまり漏らさないようにお願いします。	・入居者様の情報は漏らすことがないのが当然です。ご心配の点がございましたら、お教えいただくと幸いです。 ・町民の入居者様をケアする職員も、4割は町民であり、情報の扱いは再度徹底します。
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	A	契約前の自宅訪問、面接を重視し、ご家族の思いが理解できるよう努めている。入居後も特に初期は意識して面会時に要望等を聞き取りする。最初の介護計画説明時と、入居3～6ヶ月目に面談を行っている。			

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	B	本人の力、家族を含め本人を取り巻く資源の力を丁寧にアセスメントし、こまめに支援内容を調整している。自宅でのケアマネジャーやサービス事業所にも、経過を見ながら助言を求めている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	B	わが家のようにしゃべってもらい、入居者とともに喜び、悩みたいと職員は思っている。ともに家事をしたりしていると、支援される人という思いは自然に消えている。自然な所が、グループホームの良さだと思う。			
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	B	ご家族は支援に不可欠な存在である。外出、受診介助、物品補充等、家族が関わってもらえるようお願いしている。コロナ禍で面会中止や制限が続く、面会の大切さ、家族の存在の大きさを感ぜられた。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	C	コロナ禍で自宅や買物、町内行事への外出が殆ど不可能で、職員は歯がゆさを感じている。入居者の記憶も曖昧になるだろうし、今できるドライブ外出等をしつつも、コロナ後に再開できる準備をしておきたい。	・コロナ禍で散歩くらいしかできないが、近くの学童、幼稚園、小学校と可能な範囲で交流できれば。 ・学校からグラウンドや校外学習の情報をいただけるのなら、近くで子どもたちの活動を見ることができるといいかも。 ・車から見える景色だけでもストレス解消につながるのでは。 ・コロナ禍で、やむを得ない状況がある。 ・コロナ禍による制約が、入居者にも相当大きな影響を与えている。早く収束することを祈る。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	C	リビングでは入居者間の関係に配慮し、居心地の良い環境づくりに努めているものの、認知症からくる混乱や不安から、入居者同士が対立する場面があり、職員は対応に悩んでいる。それでも介護計画によって個々を支援して、解決していきたいと考えている。		・利用者同士の会を作って、連携を図ってもいいかも。	・1番館、2番館の間の交流は時々ではあるが、少しお出かけたような気持ちになってもらっています。わかずぎの丘も含めて、交流を続けます。
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている		死去以外の契約終了がないため、評価のランクはつけていない。今後、療養病床への移行や、在宅復帰希望がある時には、本人・ご家族の不安がないように、サービスが移行するまで支援を行いたい。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント							
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	B	ご本人の意向は日常の関わりの中で把握し、必要な時は本人とお話して確認するようにしている。家族の意向は懇談を中心に把握。「認知症だから分からない」と思わずに、その方が困っていること、嬉しいことを知ろうという姿勢でいたい。	・個々の生活状況を観察し、可能な中で意に沿えるよう努めてほしい。 ・根気のいることではあるが、粘り強く進めてほしい。 ・職員も時間的に大変だろうが、入居者の話に耳を傾けることが、良い人間関係を築く要因だと思う。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	B	入居前後の面接でこれまでの暮らし、認知症発症からの経過等を詳しく聞き取り、記録している。これらを活かして本人との関係を築いたり、サービスの工夫につなげている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	B	本人の能力をあきらめず、力を発揮していただきたいと考え、家事や軽作業を入居者とともにやっている。職員会議では様々な職員の視点を出し合い、それぞれの心身の状態、できること、思いがけない発見等を共有するようにしている。		・入居者が自室や共有空間の掃除を、職員と一緒にすることもあるのか。	・その時々入居者の心身機能にもよりますが、今はモップやほうきでの掃き掃除をしてくださる方がおられます。 ・自室と一緒に掃除している入居者はごく一部です。

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	B	介護計画策定前に再アセスメント会議を行い、計画の試行やデータ収集等をして、介護計画の充実にも努めている。少なくとも3ヶ月に一度は見直し、家族に面談して説明、同意を得ている。法人内に滋賀県認知症介護指導者が2名おり適宜助言を得ている。	・粘り強く進めてください。 ・特定の者に業務を委ねることのないように、可能な限り複数者でチェックし、利用者の意に沿う介護計画の策定に努めてほしい。		・ケアプランは入居者・家族の意向をふまえ、状況をしっかり把握し、実際にケアする職員と話しあって作り、絶えず見直しを行うものです。入居者・ご家族に分かりやすいものとなるよう、努力を続けます。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	B	記録を詳細に記し、申し送りや職員会議で情報を共有している。職員会議の2/3は介護計画検討に割いており、職員の情報共有から、迅速に計画が変更できるようにしている。		・「記録を記し、職員会議で情報共有」とあるが、最も大事で、最も難しいことだと思う。どのような工夫をしているのか。	・穏やかに過ぎた日でも、入居者の記録は全員書いている。それは小さな変化に気付く職員の力があればこそです。 ・職員会議は伝達中心ではなく、アンケートやグループワークを用いて、意見が出やすいように工夫しています。
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	C	歯科関係やリハビリ専門職とは連携可能な体制があり、ニーズに臨機応変に対応している。一方で職員の評価は低く、新たなアイデアが職員から生まれるか、話し合いをしてみたい。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	B	入居者個々の地元自治会から、直接または家族づてに見舞いが届くことがある。学童や幼稚園とはコロナ渦で直接交流ができないが、手紙のやりとりがある。公民館や地域行事に出かけて、知人と再会できる機会が奪われている現状がとても残念。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	A	入居時に主治医の継続か、協力医療機関への転医か選択してもらっている。現在は全員が協力医療機関による健康管理(月1回往診と月3回の訪問看護)を選択。専門医等の受診は家族の協力を得ながら進めている。			
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	A	月に3回の訪問看護により、担当の訪問看護師と連携を密に支援している。入居者の状態もよく把握してもらっている。介護職の小さな気づきも、遠慮せずに質問や相談ができる関係にある。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	B	病院ごとの対応の違いに戸惑うことがあるが、入院の度にこまめに足を運んで関係を作るようにしている。本人や家族と病院をつなぐ役割を心がけ、スムーズなグループホーム復帰を目指している。	・退院支援について、ここまでやっていることに感服した。		・認知症の方は、入院という環境変化で、混乱したり、状態が悪くなる方もおられます。ご家族の不安も少なくなるように、支援したいと思っています。
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	A	希望があれば、家族や医療機関と密な連携のもと、満足できる看取りの介護をめざして支援。入居時に、重度化・終末期ケアに関する指針について説明、同意を得ている。終末期には改めて意向を確認。毎年の家族懇談でも思いを聞いている。職員の達成感も高い。	・引き続き、本人、家族の理解の中で継続を。		・入居前からの本人・ご家族との協議の積み重ねが、実際のお看取りの場面で生きてくると思っています。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	B	1日のうち10時間30分が1人勤務であり、職員が不安を感じない体制を作っている。急変や事故時に職員が苦勞しないよう、24時間、緊急時対応ができるようにしている。採用時に説明するとともに、職員会議で研修や訓練を実施。			

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	B	地元自治会や近隣とは開設から15年間に積み上げた協力関係がある。消防訓練は年2回(1回は防災訓練を兼ねる)。2ユニットになり、新組織での訓練を行った。非常災害対策計画に基づき、備蓄品のチェックを実施。	・地震は突然起こり、身動きが取れない。職員も含めて身を守る行動はどのように計画されているのか。 ・地元自治会や近隣住民との関係を密にし、災害に備えてください。特に自治会とは、緊急時の支援体制にあり方について、区民の理解と協力が得られるように毎年確認を。 ・訓練を通して消化器の位置等は、体で覚えておくこと。使い方も同様。初期消火が大事。 ・自治会行事は元に戻せないことが多々あるが、グループホームとはできるだけ協力関係を継続したいと思っている。		・「非常災害対策計画」を策定し、火災、地震、風水害に備えている。見直しは適宜行いたい。 ・有事には地域の防災組織や、近隣住民の支援が不可欠なのは、各地の災害を見ても明らかであり、顔の見える関係を続けていきたい。 ・「消火訓練は体で覚えること」職員にも伝えます。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援							
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	B	職員の評価は高めである。けれども認知症の入居者は傷ついたことを訴えることができない。親しみのある関係が行きすぎて、入居者を試したり、恥ずかしい思いをさせていないか、振り返る意識が大切だと思う。	・職員であれ、入居者であれ、まずは人としての尊厳を第一に。 ・寿命が延びることで、今や認知症は誰もが通る道。認知症のことを誰よりも理解している施設職員が、良き隣人であるとの認識を持って、引き続き介護に当たってください。 ・非常に難しい事案。良いと思って前へ進めても、相手を傷つけることもある。振り返る意識は重要。		・人格を尊重することはまず第一です。高齢者への敬意を持ちつつも、心地良いわが家のような関係性を作るには、どのような接し方、言葉遣いが良いのか、現場職員がもう一度考えたいと思っています。 ・職員が精神面で傷つくこともある職種なので、その対策も職場として考えたい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	B	小さな集団で長い時をともに過ごす。だからこそ表情や動きで感じ取れることがある。小さなサインに気付き、意思表示がしにくくなっている方の思いにも応えていきたい。言葉を大切に聞き取ることは当たり前のように難しい。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	B	入居者の生活の流れに職員が合わせていく方が入居者の混乱もなく、穏やかな暮らしとなる。注意しないと職員の都合になりがちであると意識している。散歩や体操、物作り等は固い計画を作らず、その日のご様子を見て実施。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	B	髪形や髭剃りといった日常の身だしなみにも気配りを大切に、衣服はおしゃれを楽しめるよう努力している。化粧品は家族の協力を得て本人の思いに沿うようにしている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	B	毎食自施設調理。音や匂いを感じながら入居者とともに食事を楽しむようにしている。食器拭きは毎食入居者が、可能な日は準備にも参加。七草粥、節分、お彼岸や十五夜等、季節に合わせた食事とともに作っている。	・五感の一つである味覚を楽しめる食事や献立に努めている。 ・食事作りを日常活動の中で、可能な限り入居者が参画されていることで、人としての役割を見出すことができ、有意義なものと思う。 ・人が生きるということは、最後は食べるということなので、行事の際等、食事を楽しまれるようにこれからも。 ・手伝いをできるということは、入居者が前向きに意欲を持てることにつながるのでは。特に女性は食事に関心が深いのでは。 ・入居者にとって食事は重要なアイテムの一つ。自らが一緒に準備、食事、片付けをしてもらえれば最高。		・食事は毎日のことであり、多くの入居者にとって楽しみであるので、ケアの重要な柱として、大切に考えていきます。 ・季節の行事ごとの食事や誕生会のメニューは、時間を惜しまず職員が頑張っていると思います。それを支えていけるように努めます。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	B	体重や嚥下機能、希望等をふまえ、食事形態や量を考えている。水分が少ない方は、種類やタイミングを工夫。協力医療機関の言語聴覚士や栄養士に相談もできる。食事量や水分量を毎回記録。体重測定は月1回。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	B	口腔衛生管理体制加算算定。毎月、歯科衛生士の指導があり、質向上に取り組んでいる。必要に応じ、協力医療機関の歯科の往診が可能。義歯は毎日洗浄剤で消毒洗浄。その方に応じた口腔ケアを行っている。			

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	B	15名がリハビリパンツやオムツ使用。夜間のオムツ交換で本人の不快感を減らすため、全体的な見直しを行った。時間を決めず、一人一人に応じてトイレに行く等、個別の排泄介護に努めている。ポータブルトイレの使用も極力少なくしている。	・トイレでの排泄を自立させることは、大変難しい一面があると思う。個々の時間に合わせると人も手間もかかると思うが、入居者に寄り添っての活動に感謝。 ・大変な仕事ですが頑張ってください。		・排泄ケアの方法や用品(オムツ等)も年々進化しています。介護職が忌避される原因の一つが排泄ケアなので、新しい方法を取り入れながら、入居者・職員ともに負担の少ない方法を目指します。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	B	下剤を第一選択としないよう取り組んできたが、緩下剤を使用する方が増えている。野菜の多い食事、個別の介護計画で水分摂取を工夫するなど努力。重度化しても本人に負担のない範囲で、トイレで排泄できるよう取り組んでいる。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	C	職員体制から入浴日や時間帯は決めざるを得ないことから評価が低い。週2~3回の入浴を基本に、その日の気分や急な体の汚れがあれば柔軟に対応。1対1の介護でおしゃべりもしながら、くつろげるお風呂となるようにしている。	・人は、生まれながらにして湯(水)に浸かる(浴びる)ことを喜びとしており、母親のお腹にいる時からであるが、五感の中の触覚でもあると思う。職員の人的対応の課題もあるが、可能な限り、入居者の要望に沿えるように努力したい。 ・冬はできるだけ、入浴回数が多くできたら良いと思う。夏はシャワーだけの日もあれば良いと考える。		・「湯に浸かることの喜び」をお教えいただきありがとうございました。心身がリラックスできるお風呂の時間になるように、関わっていきます。 ・お風呂の回数は、入居者の介護の必要程度、職員のマンパワーを考慮しながら、考えていきます。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	B	その方の寝たい、起きたい時間に沿って対応。眠れないことが続けば、行動や心理状態の変化も踏まえて対応を考えている。日中は本人の体調や希望に合わせて、居室での昼寝など声かけしている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	B	最新の薬情報は職員がすぐに確認できる場所に設置。薬剤師とは気軽に相談できる関係にある。薬関係の事故をゼロにはできていないが、ヒヤリハットで防いでいるものもあるのが事実。事故予防策の改善は今後も続ける。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	B	無理せず、できる範囲で家事や軽作業への参加を支援。役割があることが生きがいになるように思っている。嗜好品(酒・煙草)は希望者は家族と話し合いながら実現している。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している		コロナ禍で外出が制限されており、評価のランクはつけていない。散歩は継続していて、外の空気を吸う良い機会として大切にしている。	・散歩しているのをよく見かける。 ・コロナ禍では今は少し我慢の時。		・コロナの状況が悪くても、マスクをしての散歩ならば特に問題はない。入居者の心身のためにはむしろ必要とされています。職員のマンパワーが必要ですが、時々でも出かけていきます。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している		コロナ禍でお金を使用する場に出かけられず、評価のランクはつけていない。管理する力のある方、所持することで安心感が得られる方は、ご家族と相談の上、金銭所持が可能。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	C	手紙が届くことや、電話がかかってくることはあるが、こちらからすることがないので評価が低い。ご本人の思いを把握し、必要があれば積極的に支援するよう努力したい。携帯電話を所持者は現在いない。		・可能な限り、オンラインを活用した家族とのやりとりをやってみては。	・通常業務に感染対策が加わった状態が続いており、能動的に家族とのつながり支援ができていない現状です。

自己	外部	項目	自己評価		委員からのご質問		グループホームからの回答
			職員アンケート	実践状況	外部評価項目	その他の項目	
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	B	清潔さと快適な匂いで、従来の介護施設の印象から脱却したいと努力している。日差し、外気に気を配りながら、室温や明るさのこまめな調整を心がけている。四季の花、飾り物で季節を感じていただきたいと思っている。	・プラス静かな音楽があった方が良いとも思うが、音はだめか。 ・BGMの活用は難しいのか。		・「家」であることから、BGMはあまり考えたことがありませんでした。 ・テレビの音もない静かな時間も、入居者さんには心地良さそうです。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	B	共用空間のレイアウトは固定観念を持たず、今年度も必要に応じて大胆に見直した。入居者は思い思いの場所で過ごしている。地域交流室は家族での会食等、自由な使い方が可能だが、コロナ後の課題。		・「必要に応じて大胆に見直した」の具体的な内容は。 ・折り紙、ちぎり絵、塗り絵、将棋、碁等の趣味の活用。	・2番館はオープン時に練られたリビングのレイアウトがあったが、半年後にソファの位置やテーブルの並べ方など、それまでにないアイデアで一新できたのは良かった。
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	B	個人差はあるが、自宅で慣れ親しんだ家具や飾り物等を持参されている。入居後の生活に合わせて工夫しながら、写真を飾ったり、できるだけ居心地の良い空間となるよう努めている。			
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	B	ややこしい表示の目隠し、スイッチ類の解説の表示など、必要に応じて改善。入居者の視点の高さや認知機能に配慮して工夫を続けたい。			